



名古屋港には橙色に塗装された「南極観測船ふじ」が係留保存されている

鉄のふしぎ？ 博物館

61

『铸造の鎖』



小松製作所リンクのロゴ (画像②)



南極の隕石 (ウィキペディア) (画像③)

画像はカラーと交換しています。

衣川製鎖工業・衣川良介社長

日刊産業新聞 17・10・2

「南極観測船ふじ」とアンカーチェーン (画像①)

ます。この船は南極観測船として昭和40年（1965年）に建造されました。全長100m、最大幅22m、定員は245人。砕氷能力は厚さ80cmまでの氷を連続砕氷可能。18年間活躍した砕氷船で、昭和60年（1985年）からガーデンふ頭に係留され、現役で活躍していたころの姿を、そのまま再現した船内の様子や南

極の自然や観測の意義などを紹介しています。

この船に使われたアンカーとチェーンが公園内と近くのロータリーに保存展示されています（画像①）。注意して見るとスタッドの部分、松葉菱の中に『小』の字がデザインされた小松製作所の古いロゴマークがついています（画像②）。铸造品を得意としていた小松製作所が昭和40年に「南極観測船 ふじ」用として製造したもので、铸鋼のアンカーチェーン（画像①）とアンカー

極の自然や観測の意義などを紹介しています。

この船に使われたアンカーとチェーンが公園内と近くのロータリーに保存展示されています（画像①）。注意して見るとスタッドの部分、松葉菱の中に『小』の字がデザインされた小松製作所の古いロゴマークがついています（画像②）。铸造品を得意としていた小松製作所が昭和40年に「南極観測船 ふじ」用として製造したもので、铸鋼のアンカーチェーン（画像①）とアンカー

ンカーチェーン最後の頃の製品です。昭和43年に入社した私は、チェーンの铸鋼部品は見たことがありますが、アンカーチェーンの新品を見たことがありません。主流になっていた商品がフラッシュユバット溶接のアンカーチェーンで品質の信頼性が高く、コストが安いため、铸鋼製のチェーンは生産されなくなりました。

我が国では第一次大戦（1914～18年）当時、

チェーンは鍛接で作られていました。鍛接では太いサイズの製品が出来ず、戦艦、巡洋戦艦などの大型アンカーチェーンは相当おそくまで輸入していました。また、鍛接用の素材はもっぱら英・ヒンクレー社の鍊鉄を使っていました。

このような状況を打開するため、铸鋼のアンカーチェーン開発が急務になってきました。大阪製鎖造機は海軍と協力し、輸入材料を必要としない铸鋼アンカーチェーンの研究を進め、苦心研究の末、昭和6年に初めて国産铸鋼品の製造に成功し、正式に海軍艦艇用に採用される事になりました。我が国の製鎖工業は、材料から製造まで完全に自立体制を整えました。大戦末期には、4号（約100mm）径ぐらいのアンカーチェーンが出来るようになり、大型品の輸入は必要がなくなりました。

ちなみに、我が国の南極観測の業績の一つに南極隕石の発見があります（画像③）。南極で隕石が発見されたのは1912年のオーストラリア隊が初めてですが、日本の昭和基地に近い『やまと山脈』に、100万年以上かかって千ヶ峠四方の広さの水が一方所に集まり、消えていく場所がありました。そこで、発見した隕石の数は1万6200個、南極で発見された隕石の60%に達し、日本は世界最大の隕石所有国で、世界ではじめて発見された月や火星からの隕石もあります。今後の宇宙研究に役立つことでしょう。

【参考資料】

▽産業フロンティア物語 語録・歯車（大阪製鎖造機）（ダイヤモンド社・昭和44年）
▽南極の隕石 ウィキペディア